

APD 啓発活動

『声なき声を掬い上げる社会へ』

～お互いが思い合える居心地の良い環境に～

APD Awareness Activities

“Toward to an inclusive society; listen to the voiceless voice”
～Creating a comfortable environment where we can care for each other～

グループ名：Axion

北澤 由香, 小林 彩乃, 仁藤 美和

指導教員 青野 健作

創価女子短期大学 国際ビジネス学科 青野ゼミナール

キーワード：APD（聴覚情報処理障害）、啓発活動、インクルーシブな社会、SDGs

1. 目的と現状分析

APD（聴覚情報処理障害）とは、聴力検査では正常であるにも関わらず、日常生活のいろいろな場面で聞き取りにくさ（聞いた言葉の内容が理解しづらい状態）が生じる聴覚の障害である。私たちはこれまで、立入教授（愛媛大学）、平野院長（ミルディス小児科耳鼻科）、APD 当事者会、八王子市教育委員会、ソノヴァ・ジャパン株式会社（フォナック補聴器）と意見交換を重ねてきた。その結果、現在、少なくとも日本で 130 万人が APD の症状を抱えていることが分かった（学校ではクラスに 1～2 名、八王子市で換算すると約 6 千人）。しかしながら、APD の診断ができる病院が全国で約 10 箇所と限られていること、社会的にも症状が認知されていないことから APD であることを理解されず苦しんでいる人が多く存在する。

専門家によると、APD 認知度の現況は 20 年前の発達障害という言葉が認知され始めた状況と類似していると言う。現在になって、ようやく発達障害の理解が広がってきているが、今後、発達障害と同じように、APD も社会で大きく取り上げられることが想定される。APD を抱えている人が多くいるのにも関わらず、APD について取り組んでいる地方自治

体はない。そのため、私たちの住む八王子市が、日本全国に先駆けて APD の認知度を広め、全国に理解の輪を広めていきたいと考える。

2. 提案内容

本提案のターゲットは、APD で悩んでいる人だけでなく、その周囲の人々も広く含む。APD を抱えている人に理解を示し、支え合うことで、APD で苦しんでいる人を少しでも救うことができると考える。

以上を踏まえて、主に以下の 4 点を提案する。

- ① 八王子市役所内に文字化パネルの設置
- ② 補聴器「ロジャー」と八王子市のタイアップ
- ③ 教育現場での APD 発見活動
- ④ いちよう塾で APD 講座の設置

- ① 八王子市役所内に文字化パネルの設置

情報を文字化し、情報を視覚情報とすることで APD を抱える人やその周りの人の負担が減ると考える。そこで、八王子市役所の窓口に文字化パネルを設置することを提案する。

- ② 補聴器「ロジャー」と八王子市のタイアップ
多くの APD 患者にとって補聴器をつけることが、

現実的な対策である。APD で悩んでいる人を対象に、デジタルワイヤレス補聴援助システム「ロジャー」を八王子市がレンタルすることを提案する。

③ 教育現場での APD 発見

APD は先天性であることから就職後や他人から指摘されて気づくことが多い。そのため、日常生活を共にしている教育現場で、APD を発見し、早い段階で特性に気づくことが大切であると考え。教育現場（特に、小学校）において APD を早期発見するためのセミナー等の勉強会の開催を提案する。

④ いちよう塾で APD 講座の開催

八王子学園都市大学が目指す「だれもがいつでも多様に学び豊かな文化を育むまち」を実現するため、いちよう塾の枠組みを活用し、APD 当事者会や出張講座等を開くことを提案する。

3. 期待される効果

① 八王子市役所内に文字化パネルの設置

APD を抱える人にとって、聴覚のみで全ての情報を正確に聞き取ることは難しい。また、市役所などの会話は日常生活の会話と違い言葉を推測しながら会話することが困難であるため、言葉を視覚情報とすることは効果的だと考える。

② 補聴器「ロジャー」と八王子市のタイアップ

APD を抱える人にとって、補聴器を使うことが効果的だと考えられる。しかし、現状では補聴器を使用している人は多くない。なぜなら、補聴器は値段が高いものが多いことに加えて試用することができないため、購入に踏み切ることが簡単ではないからである。そのため、デジタルワイヤレス補聴援助システム「ロジャー」を実際に使用し、自分に合っているのかどうかを知ることができるのであれば APD を抱える人を救うことができると考える。

③ 教育現場での APD 発見

APD 当事者との意見交換で、早い段階から気づくことができれば二次障害を発症することを防ぐこ

とができたのではないかという話があった。また、就職した後に APD を認識したケースも伺った。したがって、教育現場で早期発見する仕組みを整備することが効果的であると考えられる。

④ いちよう塾で APD 講座の開催

八王子市が有するいちよう塾という素晴らしい取り組みを通じて、幅広い年齢層の方が自由に参加でき、APD の知識・理解を得ることができる。

4. おわりに

APD は、本人でも「気づいていない」ことが多い。なぜなら、幼少期から「聞こえはこういうもの」と思って成長し、アルバイトや仕事の経験を通して雑音化で、聞こえが悪いと気づくことができるからである。APD は薬で治せる病気ではなく、APD のことを認識している専門家も少ない。また補聴援助機器は高価なものであり、その機器は人それぞれ合うもの合わないものがあり、簡単に手を出すことができない状況である。本提案は、聴覚情報処理障害者や音が聞こえづらい人にとって、住みやすい街をつくることができると考える。

八王子市が APD の取り組みを行うことで、全国で初めて APD 対策を行った都市として、インクルーシブな社会建設に貢献できると考えている。20 年前に発達障害の認知度が広がりを見せたように、八王子市の活動を一点突破にして、全国にその波動を拡げていけると確信している。本提案は、そのための重要な第一歩となるものである。

【参考文献】

- ・平野浩二『聞こえているのに聞き取れない：APD[聴覚情報処理障害]がラクになる本』（あさ出版、2019 年）
- ・小渕千絵・原島恒夫（編）『APD[聴覚情報処理障害]の理解と支援』（学苑社、2021 年）
- ・小渕千絵（監修）『APD（聴覚情報処理障害）が分かる本：聞きとる力の高め方』（講談社、2021 年）
- ・加我君孝（監修）『聴覚情報処理検査[APT]マニュアル』（学苑社、2021 年）